

郷土の伝統産業

越前和紙のことを
知ろう

福井市立郷土歴史博物館

○何のために紙は造られたのですか？

文字によって、自分の意志を他人に伝えるために紙は造られました。今から約二千年ぐらい昔のことです。

それよりもっと昔、四、五千年も前に、人間がものを書く材料として使ったものは、石・獣骨・粘土・動物の皮・木板・木の皮・竹などでした。

これらの中で、今日の紙も最も近いのが、古代エジプトでパピルス草の繊維せんいから造ったパピルスです。これはヨーロッパに紙が伝わるまで、羊皮紙ようひし（羊の皮）とともに、数千年間使われてきました。ヨーロッパ各国語の紙の語源は、このパピルスにあると言われています。英語で「ペーパー」、フランス語で「パピエール」と言います。

○紙は誰が造り始めましたか？

西暦一〇五年に後漢ごかん（中国）の蔡倫さいりんと言う人が、世界で最初に手

（メモ）

漉紙すきがみを発明したとされています。

日本に初めて紙が伝わったのは、二八五年で、百濟くだら（南朝鮮）の王仁わにがたずさえてきた「論語ろんご」、「千字文せんじもん」によってであると考えられており、更に六一〇年には、高麗こま（北朝鮮）の僧曇徴どんちようによって、日本に初めて紙を造る方法が伝えられたとされています。そして、江戸時代まで全国で盛んに手漉紙が造られました。明治の初めに洋式製紙機械が輸入されて、洋紙が造られるようになってからだんだん衰えてきました。今では手漉和紙てすきわしを造る家は全国でも数百戸しかありません。

○福井県では、いつごろから紙が造られていましたか？

奈良時代からです。昔からの和紙生産地であり、現在でも日本の有数な和紙生産地は、今立町の大滝おおたき・岩本いわもと・定友さだとも・不老おひす・新在家しんざいけの五地域を含んだ五箇地方ごかです。この五箇地方の伝説によると、大昔、岡本川の上流に女神めがみが現われて、村人に紙漉の技術を教えられたので紙を漉くことが始まったと伝えられています。

江戸時代ともなると、五箇地方で造られる奉書・鳥の子紙は有名となり、特に奉書は、全国の奉書の中で最も優秀と言われ、また、和紙の中でも一番上品なものとなされ、朝廷や幕府に多く納められました。

○今日の福井県内手漉和紙の生産地はどこですか？

今立町の五箇地方と小浜市和多田の二ヶ所です。

○手漉和紙の原料は何ですか。

楮・三桮・雁皮と言った植物がおもなもので、いずれもそれらの皮を使うのです。一番多く使われるのが楮、次が三桮です。雁皮は、わが国で古くから使われてきましたが、栽培出来ないのです。今はわずかししか生産されず、特別の紙にしakaiません。

○それらの原料から、どういう紙が出来ますか？

楮……繊維は各種の原料の中で最も粗大であり、強くて長く、

また、からみ合いの性質が強いので、紙は強靱きやうじんもで揉みに耐えます。奉書・檀紙だんし・杉原・美濃紙・障子紙しょうじ・傘紙かさ・版画用紙・襖紙ふすま・ちり紙などになります。

三楮みつまた……繊維は細長く光沢に富み、機械漉き用原料として相当多く使用されています。優美さを持ち、良質な高級紙として多く使用され、紙幣しへい・便箋びんせん・印刷及び筆記用・記録用に適しています。

雁皮がんぴ……繊維の性質は細くて強く、湿潤状態においても大変強靱きやうじんで、固有の光沢があり、透明な馴れのよい紙が出来ます。

鳥の子・謄写版原紙・箔打紙はくうち・美術工芸用紙・永久保存用などの高級和紙に適しています。

○手漉和紙は、どんな方法で造るのですか？

手漉きの方法は、どの原料でも大体かわりがないので、ここでは、最も多く使われる楮こうぞについて述べて見ましょう。

一、楮を蒸してから皮をむき、外側の黒いところを取り去り、内

側の白皮を原料にします。

二、白皮を水の入っている大きな釜に入れ、更にソーダを混ぜて煮ます。繊維にほどくためです。これをよく水洗いして、薬品を洗い流すと同時に、混じっている塵などをひろい出します。

三、この繊維は長いままですから、ひらたい石か厚い板の上でたたいて細かくし、更に水洗いをします。ついで、これを四角い水槽（舟と言います）に入れ、水でうすめて紙に漉くのです。

四、普通、和紙を漉く時には、黄蜀葵の根からとれる粘液性の「ねり」（「のり」と間違えてはいけません）を加えます。「ねり」は大へん重要な役目をしますが、後で説明します。

五、水を入れた舟の中へ、繊維と「ねり」を加えて、よくかき混ぜます。これが原料です。次は漉き方です。

竹の簀（皆さんの使う筆まきのようなもの）をはさんも簀桁で、舟の中の原料をすくい上げますと、水は簀の目から下へ流れ落ち、原料だけが簀の上に平らにはりつきます。紙の厚さは、すくい上げる度数で決まります。舟の中の原料を底に沈澱させず、またす

くい上げた原料の水が一度にドッと簀の目からぬけ落ちないように、ねばり気のある「ねり」が目に見えぬ働きをしてくれます。

六、簀の上にはりついた原料、つまりぬれ紙をはがして、板の台の上に積み重ねます。これが何百枚にもなった時、重石をするか、機械を使うかして水分をしぼります。

七、しぼったぬれ紙を、一枚ずつめくり取って板に張り、かわかします。漉き上げたぬれ紙を次々に何枚も重ねていく時、間に何も仕切りを入れてないのに、めくる時少しも破れず、紙と紙とはりつかないのも、「ねり」のおかげです。

八、板に張ったぬれ紙は、天日に数時間ほせば、すっかりかわきますから、はぎ取って、破れや悪いものをのぞき良い紙だけを選び出します。

これで手漉紙は出来上るわけです。

○手漉和紙の使いみちは？

一流画家の用紙、版面用紙、美術本や複製古文書印刷用紙、障子

や襖紙、便箋、封筒、名刺など、比較的高級を必要とする方面において愛用されています。

○手漉和紙の無形文化財指定

日本の誇るべきこの手漉和紙の技術をのこすため、福井県では、岩野市兵衛氏（国指定）と岩野平三郎氏及び広場治左衛門氏（県指定）の三氏が、無形文化財に指定されています。

○現在手漉紙を造っている主な県は？

福井県の外、愛媛・高知・岐阜・埼玉県などです。

○自分で紙を漉いてみましょう。

手近かにある品物を使って、紙漉きを実験してみたらどうでしょう。きつと紙漉きですが、よく頭に入るに違いありません。

(→)用意するもの

一、筆巻の「すだれ」でも、寿司をつくる「すだれ」でも一枚。

一、好きな寸法（小さければハガキの大きさぐらい）の木の枠わくを二つ造ります。

一、「すだれ」を枠わくと同じ寸法に切ります。

一、枠を前後左右に、自由に動かせるぐらいの水のもらない箱か「たらい」を一個。

一、原料をかき混ぜませる棒一本。

一、紙をほすのに使う板（日の当る壁や戸を利用してもけっこうです。）

一、原料をすりつぶすのに使う「すり鉢」、
「すりこぎ」（ミキサーならば一番けっこうです。）

一、原料として、古い障子紙・ノート・古新聞紙など。

（二）造り方

一、古い紙を「すり鉢」に入れ、水を加えて紙の形がなくなるまですりつぶします。（なかなかつぶれませんが、ミキサーを使えば、一分とはかかります。大体の分量は、半紙一枚に牛乳ビン三本ぐらいの水でいいでしょう。）

一、うすめた原料を箱（又は「たらい」）に入れ、よくかき混ぜます。

二つの枠にはさんだ「すだれ」をザブリと箱に入れ、原料をすくい上げます。厚い紙にするには、何べんもくりかえし原料をすくいます。

一、「すだれ」を枠からはずし、そのまま天日にほせば、紙は一枚出来るわけです。何枚も漉く時には、一枚ごとに「すだれ」からはがします。紙の方を下にして「すだれ」を板の上のせ、よくおさえて水気みづけを取り去り、「すだれ」をはしの方からジワリジワリと上げてはぎます。この時ぬれ紙は板にはりついていきますから、そのまま日にほします。二枚目は、この上に重ねずに、別のところへはります。紙と紙とがはりつき合わないためです。

○さて皆さん、わかりましたか？

では、次の質問に答えて下さい。

- 一、世界で初めて紙が造られたのは、いつ頃で、どこの、なんと言う人であるとされていますか？
- 二、日本に最初に紙を造る技術を教えたと言われている人は誰ですか？
- 三、福井県では、何時代から紙を造っていましたか？ 又、現在でも手漉和紙を漉いている所を二つあげて下さい。
- 四、手漉和紙の主な原料を三つあげ、更にそれぞれについての性質及び造られる紙をあげて下さい。
- 五、「ねり」(黄蜀葵とろろあおい)はなぜ使うのですか？(これは大へんむずかしい。よく考えて下さい。)

福井市立郷土歴史博物館編

昭和四十八年五月一日発行